



## 私の視点

先日の鳥取県立高校の受験倍率を見てあせんとした。豊田太蔵・治親子が命がけて創立した山陰初の私立中学が前身の鳥取中央育英高校。

平成29年には創立110年になる光輝く伝統ある育英の受験者数は定員の半分なのだ。足がすくんでしまった。

私が若い頃、育英生は東大、京大、早稲田、同志社などに進学していた。現在はといえば、実に寂しい。別に俗にいう一流大学に進学したから素晴らしいというのでなく、多くの生徒がバンカラというか荒削りの「育英魂」と夢を持ち、力いっぱい

## 母校に誇りを持つとう

生活していたように思う。

学区制も変わり、また時世の流れも昔とは大いに異なる。昔は良かった、今はどうの…と言った懐古主義ではない。ただ在校生の皆さんは、輝かしい伝統校であるといった誇りを持ち続けてほしい。学校や在学生を責める気持ちはさらさらないが、今この現状をしっかりと認識し、改めて立て直しを図ってほしいと心の底より願うばかりだ。

の娘さん。叔父と彼の姉である私の母とはとても親しく、豊田親子の素晴らしさをよく語っていたことを鮮明に覚えている。豊田親子は貧しき青年をとこえ、有為な人材を育成し、その人たちが育英魂を後輩に伝えていた。育英魂の根底にある「克己」の精神をいま一度、関係者は思い起こし、育英の再起を図りたいものだ。

「失ったものを嘆くのでなく、経済的に苦しかった私の叔父は、豊田親子の支援を得て医師となり、豊田親子の気持ちをしっかりと受け継いだ。縁とは不思議なもので、彼の奥さんは育英の校長をしていた貝山秀一郎(歳)

阪本 秀樹(北栄町下種、77